

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	21221011	研究期間	平成21年度～平成25年度
研究課題名	牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究	研究代表者 (所属・職) (平成26年3月現在)	嶋田 義仁（名古屋大学・大学院文学研究科・教授）

【平成24年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地域に多様に展開した諸文明の構造と歴史的展開を、特に牧畜文化の観点から分析し、新しい文明論の構築を試みたものである。研究代表者や研究分担者が提起している乾燥文明の4類型論や家畜による文明形成システムの構造分析、人類史の中における牧畜文化の位置付けの再構築の試みは、乾燥地文明論を超えて現代政治にも通底する問題を提起しており、研究成果の公表も順調に行われている。</p> <p>しかしながら、牧畜中心の文明論の提起や乾燥地文明形成のロジックの解明を狙うためには、各研究分担者が行ってきた家畜文化に関する研究成果の総合化が必要であると考えられ、今後この面での研究の展開が望まれる。</p>	

【平成26年度 検証結果】

検証結果	<p>まず、従来の文明史を書き換えるような壮大な目的を掲げて、多様な研究分野・地域を背景に持つ多数の研究者をまとめあげ、多様な課題について独創的かつ重要な成果を数多く得た点について高く評価したい。こうした成果は、本研究が主導して刊行した論集・論叢書や本研究で主催した国際シンポジウムにとりまとめられている。その一方で、研究進捗評価結果で指摘された家畜文化に関する研究成果の総合化については、今後の論文等の発表を通じて更に推進する努力が必要であろう。具体的には、研究開始後に蓄積されたデータに基づいて、本研究が提案した乾燥地文明の4類型の妥当性を検証していくことが望まれるが、総合的に判断すると、当初目標に対し、期待どおりの成果があった。</p>
A	